

平塚市モデル事業における構造

モデル事業における平塚市の取り組みでは、大きく3つの構造があった。地域福祉推進会議、庁内横断的会議、そして、モデル地区におけるワーキンググループである。これらはそれぞれ、地域福祉における専門関係者、行政内部、一般市民とのパイプを形成している。必ずしもそれらは、相互に直接的に関与する関係にはないが、三つの各場面では、折々に他の状況が報告されるなど、三者が同時進行的に推進され、相互に情報を共有することで、コンセンサスの形成に大きく貢献したものと思われる。の地域福祉推進会議は、民生委員・児童委員協議会、自治会、市社会福祉協議会、社会福祉法人、福祉事務所、医師会等で構成されていた平塚市保健福祉総合推進委員会の委員等に、新たにNPO法人や地域におけるボランティア活動を行っている関係者などを加えて構成されており、これまで、また、これからも、地域の福祉推進に重要な役割を担う立場にある。モデル地区における一般市民の声や活動の様子が伝えられることで、専門的立場からの検討に参考にされ、また、市民のワーキンググループでは、この会議を通じた関係者の協力は大きなバックアップとなり、その評価は自信にもつながっていく。の庁内横断的会議は、関係各課長による検討会議と、担当者や実際に個別サービスに関わるケースワーカーで構成される部会からなる。担当部署ごとの視点は、領域的課題を見落とさないための装置として有効に機能したばかりでなく、専門分化することで、これまで各部署が対応に苦慮していた課題が地域福祉という視点でどのように捉え直すことが可能であるかを検討する場となった。の一般市民によるワーキンググループは、公募市民によって構成されている。参加者には、民生委員や地域での福祉関係者も少なくないが、皆、個人として参加していることで、の地域福祉推進会議とは性格を異にしている。また小学校区という小地域を単位としており、所属の立場を離れた市民としての見解が存分に発せられた。今回はモデル事業でもあり、1地区を選定して行われたが、これに先立ち全市的な住民実態調査を行って、この点を補足している。

